



第三回

Japan Association of Cranio-orofacial Growth Guidance

顎顔面口腔育成研究会学術大会

日時: 平成26年10月25日(土) 9:30~16:30・26日(日) 9:30~16:50

会場: 御茶ノ水ソラシティーカンファレンスセンター

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台4-6 TEL.03-6206-4855

「顎顔面口腔育成研究会」は今年で3年目を迎えます。今年の大会テーマは、「呼吸と顎顔面口腔育成治療」です。近年、開口姿勢が顔の成長に影響をおよぼすことが指摘され、多くの研究者が呼吸と顎顔面との関係について言及しています。「咬合」は、本来こういった複合組織機構の一領域であります。今大会は、鼻の機構や胎生期の問題が呼吸様式を如何に左右し咬合に関係しているかといった問題を取り上げています。この大会が、臨床にお役に立つことを願っています。

顎顔面口腔育成研究会会長 三谷 寧

特別講演



10月25日(土)

吉田 敦子

母と子の整体サロンmommy&baby高輪
NPO法人母子整体研究会副代表理事
NPO法人母子フィジカルサポート研究会代表理事

「母親のからだは胎児の環境- 胎児の発育発達と胎内生活-」



10月26日(日)

氷見 徹夫 (M.D., Ph.D.)

札幌医科大学卒業
札幌医科大学耳鼻咽喉科学教授
札幌医科大学附属総合情報センター長

「扁桃・アデノイドはなぜあるのか? 鼻は何をしているのか?
- 粘膜免疫・粘膜防御の最前線を探る -」

基調講演



10月25日(土)

石田 房枝 (茨城県つくば市開業)

「無歯期乳児における口蓋形態の成長発育」



10月26日(日)

三谷 寧 (D.D.S., Ph.D.)

「Ⅱ級1類不正咬合の機能と形態」

一般講演



石田 亮人 (大阪府泉佐野市開業)

「顎顔面口腔育成のイントロダクション」



有山 清吾 (奈良県奈良市開業)

「顎顔面口腔育成治療の歩み方」



中澤 吾郎 (大阪府東大阪市開業)

「小児気管支喘息患者へのRAMPA・バイオブロック療法
- ピークフロー値とその臨床的検討 -」



矢島 由紀 (佐賀県佐賀市開業)

「全身疾患と前方成長とのかかわり」



岩前 里子 (埼玉県児玉郡開業)

「直立動態を考慮したRAMPA、バイオブロックセラピー」



齊藤 英喜 (福岡県福岡市勤務)

「症例を通して犬歯間幅径を考察する」



白井 栄二 (大阪府茨木市開業)

「バイオブロック、RAMPAセラピーを経験して」



末竹 和彦 (長崎県松浦市開業)

「バランス」



福重 真佐子 (大阪府河内長野市開業)

「バイオブロックとRAMPA 日々の診療への導入」

※ 他ポスター発表多数あり

3rd The Japan Association of Cranio-Orofacial Growth Guidance



■ 日時 2014年10月25日(土)26日(日) 9:30 ~ 16:50

■ 場所 御茶ノ水ソラシティー カンファレンスセンター

〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台4-6
03-6206-4855

10月25日 (土) 司会：三谷 寧

9:00 受付

9:30～11:00 吉田 敦子 「母親のからだは胎児の環境」
～胎児の発育発達と胎内生活～

11:10～12:10 石田 房枝 「無歯期乳児における口蓋形態の成長発育」
Palatal growth changes from birth to
7 months of age

12:10 ***** LUNCH *****

13:30～14:30 石田 亮人 「顎顔面口腔育成のイントロダクション」
Introduction of Cranio-Orofacial Growth
Guidance

14:40～15:10 齊藤 英喜 「RAMPA・Bioblocセラピーにおける犬歯間幅径の考察」
Implication of canine width of RAMPA・
Biobloc therapy

15:10～15:40 有山 清吾 「顎顔面口腔育成治療の歩み方」
Steps of the Cranio-Orofacial Growth
guidance.

15:50～16:20 白井 栄二 「バイオブロック・RAMPAセラピーを経験して」
Competent trial and experience: Biobloc
and RAMPA therapy

16:20～16:50 中澤 吾郎 「小児気管支喘息患者へのRAMPA・バイオブロックセラピー」
～ピークフロー値とその臨床的検討～
Application of RAMPA・Biobloc therapy
to an infant bronchial asthmatic:
Implication of Peak Expiratory Flow

10月26日（日） 司会：清水 正裕

9:30～11:00	氷見 徹夫	「扁桃・アデノイドはなぜあるのか？鼻は何をしているのか？」 ～粘膜免疫・粘膜防御の最前線を探る～
11:10～12:30	三谷 寧	「Ⅱ級1類の機能と構造」 Class II div.1 malocclusion: Function and Morphology
12:30	*****	LUNCH *****
13:30～14:30	末竹 和彦	「バランス」 Balance
14:40～15:40	矢島 由紀	「全身疾患と前方成長とのかかわり」 Cranio-orofacial forward growth guidance and systemic disease
15:50～16:20	福重真佐子	「バイオブロックとRAMPA 日々の診療への導入」 Introduce of Biobloc therapy & RAMPA therapy
16:20～16:50	岩前 里子	「直立動態を考慮したRAMPA・バイオブロックセラピー」 RAMPA and biobloc therapy approaching from gravitational physiology

特別講演

吉田 敦子 (よしだ あつこ)

〈略歴〉

- 1983年 東京大学医学部附属助産婦学校卒業
名古屋市立大学病院勤務
- 1986年～1988年
青年海外協力隊にて、アフリカのマラウィ共和国に派遣
帰国後 市立病院、都立病院勤務
- 1993年 出張専門助産所開業
- 2005年 母と子の整体サロン mommy&baby高輪 開業
- 2006年 NPO法人母子整体研究会 副代表理事就任
- 2011年 NPO法人母子フィジカルサポート研究会 代表理事就任
- 2012年 「おなかにいるときからはじめるべびいケア」上梓



【母親のからだは胎児の環境】～胎児の発育発達と胎内生活～

胎児は、「子宮」という限られた空間の中で発育発達しています。子宮内は羊水で満たされていますので、そこで浮遊しながら、子宮筋の緊張による圧力や子宮腔の形の変化、そういった変化する子宮壁への接触、母体の動きによる振動やねじれなどの動きに影響されて生活しています。胎児の骨格や筋肉の発達には、それらがもっている動きをすべて自由にできる環境が望ましいと考えます。胎児が自由に動き回れる子宮です。しかし胎児が大きくなってくると、胎内での姿勢はかなり制限されてきます。その時に望ましいのは、安定した安全な姿勢・・・重い頭を下にして、四肢も体幹も屈曲した、屈筋群優位で左右対称な姿勢です。つまり子宮は、妊娠初期から中期にかけては、胎児が十分いろいろな動きが体験できて、妊娠後期には安定した姿勢がとれる環境であることが理想です。腹壁上からは左右対称に丸く柔らかく触れることができる子宮、その子宮を支える骨盤も左右対称で傾いたりねじれたりしていない、腹筋群も子宮を支えるだけの力を持ち、また、上腹部や肋骨弓は柔らかく子宮が広い空間で成長できる、ということが大切だと考えています。また、子宮やその周りの骨盤内臓器を支え、骨盤を内側から支える骨盤底筋群がしっかり働けることも大切です。

また、妊婦は、だんだん大きく重くなる胎児と子宮とともに生活していくために、からだの機能が適応していきます。その適応のひとつに姿勢の変化があります。妊婦の姿勢を見ることで、胎児の環境についてのアセスメントができます。姿勢は、からだの支持力の様子を表していますので、支持力が弱くなることで起きてくる、妊娠中のマイナートラブルを予防、改善することで、妊婦が生活しやすい楽なからだでいることができ、胎児の環境整備にもなるでしょう。

本講演では、胎児が子宮内で生活している様子や妊産婦の姿勢や腹部の変化、胎児が安定した屈筋群優位の姿勢でいられないとどんな影響があるのかについてお話しします。また簡単な体操やケアで、からだのバランスや姿勢が変化することを、体験してみましょう。

石田 房枝 (いしだ ふさえ)

〈略歴〉

1965年 日本歯科大学卒業
1965年 日本歯科大学矯正学教室小児歯科入局
1967年 千葉県松戸市石田歯科医院勤務
1978年 茨城県八郷町石田歯科医院勤務
1983年 茨城県つくば市開業
2014年 赤ちゃん歯科ネットワーク代表 現在に至る



【無歯期乳児における口蓋形態の成長発育】

Palatal growth changes from birth to 7 months of age

誕生直後から無歯期である7ヵ月間の健常乳児の口蓋の発育過程を調べる目的で32名の赤ちゃんから採得した口腔模型の解析を行った。

模型の外枠である歯槽堤部分の横幅は月齢を追って大きくなった。また生まれた時大きかった子は、7か月後も大きいというように生直後の要因を保持していた。長径もその傾向があるが、幅径ほど顕著ではなく、何らかの環境要因の影響を受けて変化していると考えられる。

一方歯槽堤の内側の口蓋部分は、発育様式を異にしている、平均的には3カ月くらいまでは大きくなったが、以後は月齢に伴う変化があまり見られなかった。また個人差が大変大きかったので、環境要因により変化が現れる部分であると考えられる。

口蓋部分の形質の中では最大深の大きさとその位置の影響が最も大きかった。我々は実際治療を行っていく中で、口蓋の深度については頬筋と口輪筋とが関係しているのではないかと、位置については、中顔面の前方成長と頭蓋底の傾きとの関係があるのではないかと気づいていたが、そのような現象が乳児期早期から起こっていることが分かった。顎の望ましい成長のためには赤ちゃんの発育に関心を持っていく必要性のエビデンスを提示する。

基 調 講 演

石田 亮人 (いしだ りょうと)

〈略歴〉

1994年 岡山大学歯学部卒業

1994年 筒井歯科勤務

1997年 PIO畠山歯科勤務

2001年 石田歯科クリニック開業

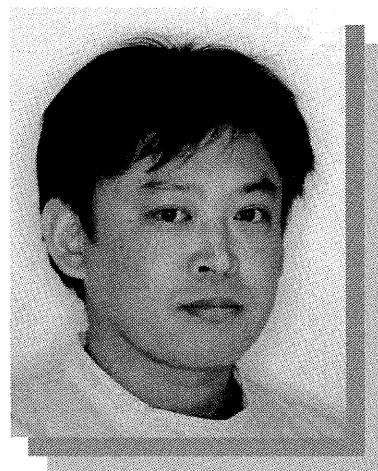
バイオブロックマスター

RAMPA 認定医

JPIセミナー講師

顎咬合学会認定医

RAMPA Educational Institute 公認指導医



【顎顔面口腔育成のイントロダクション】

Introduction of Cranio-Orofacial Growth Guidance

顎顔面口腔育成研究会は今年で3年目を迎え、研究会員も年々増加し300人を大きく超えてきている。

当初は既に顎顔面口腔育成治療を行っている先生方が大多数だったが最近是新卒もしくは未経験の先生・医療従事者からはじまり、他方面でご活躍の先生方や他業種の先生方も参加されるようになってきた。

そこで「大会だけではどういう治療をしているのかわからない。」「紹介されて来たが、そもそもどういう方向性の研究会なのか？」という趣旨の質問を頂くことがあった。

今回は大会参加者の共通認識を得るため、会員発表に先立って研究会の医療哲学を再確認できたらと思う。

ただ、あくまで医療哲学であってそれに向かう治療方法を限定するのではないことは併せて記しておきたい。

一般講演

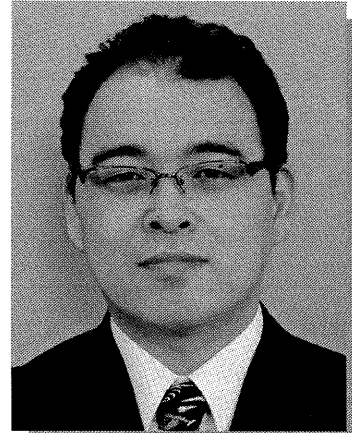
齊藤 英喜 (さいとう ひでき)

〈略歴〉

1993年 福岡歯科大学卒業

1993年 松尾歯科医院勤務

2001年 ますらお歯科医院勤務



【RAMPA・バイオブロックセラピーにおける犬歯間幅径の考察】

Implication of canine width of RAMPA・Biobloc therapy

顎顔面口腔育成治療の主たる目的は、生理的な成長方向に一致させた顔面の水平成長と気道の拡大です。上顎の側方拡大による舌房の確保と上顎複合体の前方移動は、この療法では一般的な術式ですが、しばしば、犬歯間幅径は後戻りを認めます。今回、そういった現象と治療上の問題点についての考察を深めていくつもりです。

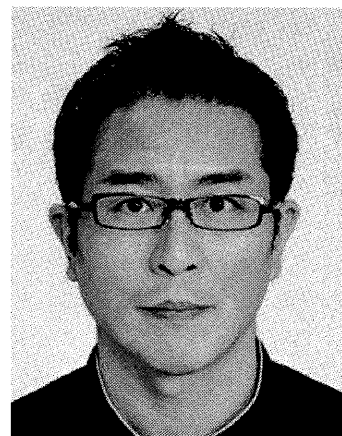
一般講演

有山 清吾 (ありやま せいご)

〈略歴〉

1999年 大阪歯科大学卒業

2007年 有山歯科診療所開業



【顎顔面口腔育成治療の歩み方】

Steps of the Cranio-Orofacial Growth guidance.

バイオブロック、RAMPAによる顎顔面領域の理想的な方向（水平方向）への誘導によって得られる結果は多岐に渡る。エビデンスのないことの発言は慎むべきだと考えているが治療によって得られる結果に耳鼻科、眼科領域の症状の改善がある。私は現時点ではこれをこの治療の「副産物的恩恵」と考えている。

私は、顎顔面領域の機能レベルの改善によってこの「副産物的恩恵」を含め患児たちのこれからの人生がどの程度良くなるかは解り得ないが、私の観察では間違いなく良くなる望みを持っているという事である。

しかし得られる結果は素晴らしいものではあるが、治療の難しさや患児たちやその御家族の協力・涙ぐましい努力を抜きにして語ることはできず、テクニックの一人歩きはあり得ないと考えている。私はこの世界に飛び込んでたかが5年であるが毎日必死で歩んできた。

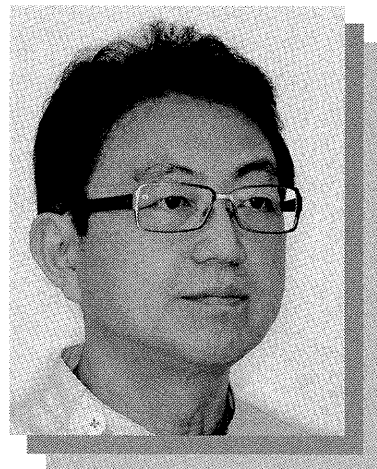
その原動力は感情であり“想い”である。今回はすでに多くの結果を出している先生方には少々退屈に感じるかもしれないが私と同じようにこれから頑張るぞ!!と言う仲間とその“想い”を共有するために発表したいと思う。

一般講演

白井 栄二 (しらい えいじ)

〈略歴〉

1980年 大阪大学歯学部卒業
1980年 大阪大学歯学部歯科矯正学教室入局
1983年 大阪大学歯学部生化学教室入局
1987年 堀坂歯科医院勤務
1991年 白井歯科医院開業



【バイオブロック・RAMPAセラピーを経験して】

Competent trial and experience: Biobloc and RAMPA therapy

バイオブロックの臨床に携わって3年、RAMPAセラピーも手掛けるようになりました。当初はオーソトロピクスの哲学が理解できず混乱する日々が続きましたが、臨床経験を増すにつれて診断学であるという意味が深く理解できるようになると同時に、細かなテクニックも要求されることがわかってきました。理論的な実践、即ち、臨床での結果は、原因因子の認識と中顔面の前方誘導という結果がすべてに優先されます。今回、少ない経験ではありますが、診断と各ステージにおける注意点と調整について発表いたします。

この臨床に携わる一人として、私と同じように悩み苦しみながら前進している先生方の臨床に役立つことを願っています。

一般講演

中澤 吾郎 (なかざわ ごろう)

〈略歴〉

1993年 岡山大学歯学部卒業

2007年 中沢歯科クリニック開業



【小児気管支喘息患者へのRAMPA・バイオブロックセラピー】

～ピークフロー値とその臨床的検討～

Application of RAMPA・Biobloc therapy to an infant bronchial asthmatic:
Implication of Peak Expiratory Flow

小児気管支喘息認定患者（アングルの分類Ⅱ級Ⅰ類）に対しRAMPA・バイオブロック療法を行い、症状の消失をみた。

本症例では、並行して2年以上にわたり家庭用ピークフローメーターにてピークフロー値（PEF値・最大呼気流量）を日々計測しつづけた。その手法の実際と結果について臨床的検討を加えたい。

氷見 徹夫 (ひみ てつお)

〈略歴〉

1980年 札幌医科大学卒業

1986～1988年

ペイラー医科大学 Neurosensory Center 耳鼻咽喉科留学

1991～1996年

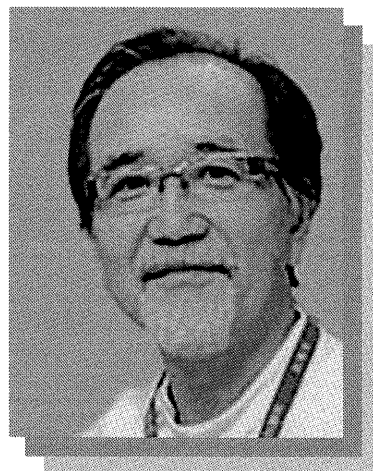
札幌医科大学 耳鼻咽喉科学講座講師

1996～1999年

札幌医科大学医学部 耳鼻咽喉科学講座助教授

1999年 札幌医科大学医学部 耳鼻咽喉科学講座教授

2013年 札幌医科大学 国際交流部長



【扁桃・アデノイドはなぜあるのか？鼻は何をしているのか？】

～粘膜免疫・粘膜防御の最前線を探る～

口腔咽頭および鼻腔を形作るのは顎顔面骨であるが、その成長過程では同部位の軟部組織の形態や機能との相互作用が重要であることが知られている。乳幼児期の閉塞性睡眠時無呼吸（OSAS）の発症にはこの軟部組織構成臓器である扁桃が強く関与しており、さらに、近年では鼻腔形態や鼻粘膜も重要であることが強調されている。さらに、小児期のOSASの放置が顎顔面形態の発育を妨げ、成人のOSASへの発症要因になっていることも知られている。このため、顎顔面口腔疾患の診断・治療に関与する医療従事者が「扁桃」や「鼻」の基本的な知識を整理しておくことは重要と考える。

粘膜防御機構は自然免疫の最前線であり、上皮細胞に加えて免疫系細胞などを含む複合的なシステムで構築されている。乳幼児期から小児期にかけての免疫機能の発達には様々な免疫担当臓器が関与している。耳鼻咽喉科領域では扁桃・アデノイドに代表される粘膜関連リンパ装置は、その抗原捕捉機構を駆使して、免疫記憶の形成と特異的抗体産生機構に関与している。一方、上気道の最前線である鼻粘膜もまた抗原捕捉に伴う免疫反応を行っているとともに、ウイルス・細菌感染やアレルギー炎症の場としても重要である。粘膜免疫の立場からは、鼻粘膜は粘膜免疫の実行組織であり、扁桃・アデノイドは咽頭関連リンパ組織の誘導組織としての違いがある。また、上気道粘膜免疫、上部消化管粘膜免疫という違いも考えられる。近年、粘膜防御機構での粘膜上皮細胞の重要性が強調されている。すなわち、上皮細胞に対する各種の刺激により引き起こされる上皮細胞自身の免疫反応・機能変化が、炎症の成立や、さらに疾患の型を作り上げているとの概念である。これらの概念の重要性は、口腔咽頭粘膜や上気道粘膜でも例外ではない。

われわれは、扁桃・アデノイド、鼻粘膜の研究から上皮細胞機能を含めた自然免疫の新しい概念を提唱してきた。しかし、小児期の免疫機能の成熟をこれらの臓器で考える際には、これらの臓器の免疫臓器と感染臓器という二面性を考慮して、臓器の意義づけを行う必要がある。扁桃・アデノイド・鼻はなじみの深い臓器だが「小児期の免疫機能成熟にどのように関与しているのか？免疫臓器としてなにをしているのか？」という疑問は解決されず、感染臓器としての側面を考えると、免疫臓器の恒常状態だけを論ずるだけでは全体像をとらえることはできない。

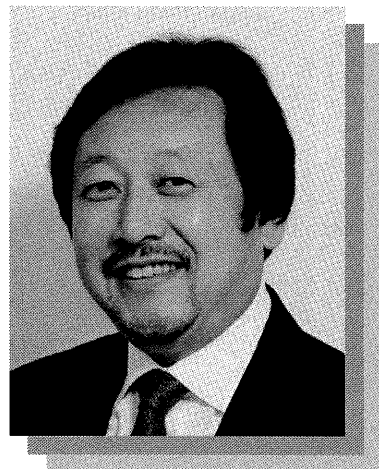
本講演では、歴史的な背景にも触れながら、われわれの最近の研究より得られた知見をもとに、基本的な免疫臓器としての機能解析から、それぞれの類似性・相違性、自然免疫・獲得免疫での位置づけ、さらに、感染臓器としてのとらえ方に言及する。このことから、「扁桃・アデノイドはなぜあるのか？鼻はなにをしているのか？」という漠然とした疑問について、少しでも正解に近づけるように論点をまとめていくつもりである。

基 調 講 演

三 谷 寧 (みたに やすし)

〈略歴〉

1981年 松本歯科大学卒業
1998年 日本歯科大学新潟校衛生学教室にて学位取得
2007年 RAMPA Educational Institute Chair
2013年 顎顔面口腔育成研究会会長
2013年 吉祥寺こども診療室（顎顔面口腔育成治療専門医院）開院



【Ⅱ級1類の機能と構造】

Class II div.1 malocclusion: Function and Morphology

Ⅱ級1類の異常は、口呼吸と関連性を有するということが多くの研究者によって指摘されていますが、統一した見解はありません。最近の調査では、口呼吸を伴う開口との関連性が報告され、こういった患者では顔貌自体が後方回転していると指摘され、下顔面高の増大は大きな特徴の一つとして指摘されています。演者はこの対処方法の一つとして、上顎を含めた中顔面領域の前上方への牽引システム、RAMPAセラピーを用いて上・口・下咽頭領域の開大による鼻呼吸の確立によって、Ⅱ級1類不正咬合を治療する新しい治療方法を確立しました。

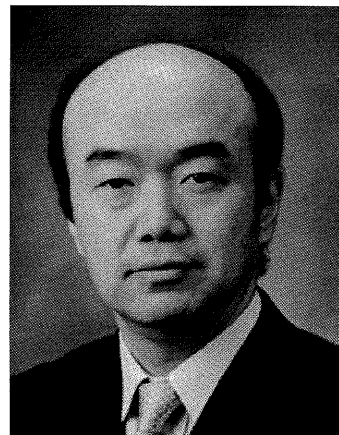
従来の前方牽引装置の特徴は、A点の前方移動を伴う、SNB、口蓋平面、および下顎切歯角における減少と、SNA、ANB、Wits、下顎下縁平面角、上顎切歯角等の増大等が指摘され、結果的に上顎のcounterclockwise rotationと下顎のclockwise rotationを副作用として認め、顔面高は増大します。RAMPAセラピーは、従来型の上顎牽引とは異なり、上顎をclockwise rotationさせ下顎をcounterclockwise rotationさせながら上顎を前方へ牽引する方法で、その治療目的は、垂直方向の成長パターンを水平方向の成長パターンに変更して気道体積の増大を伴う鼻呼吸の確立にあります。

この治療方法は、本来難しいとされたⅡ級1類の下顎の前方移動を可能にするばかりか、Ⅱ級でありながら上顎を前上方へ誘導するという今までの概念では考えられない治療方法といえますが、この意味するところは、口呼吸から鼻呼吸への変換にあり、この臨床体系は歯科医学の可能性を示すものであると演者は考えています。

末竹 和彦 (すえたけ かずひこ)

〈略歴〉

1988年 鹿児島大学歯学部卒業
1994年 末竹歯科医院開院
2000年 医療法人社団末竹歯科医院設立、理事長就任
バイオブロックオーソトロピクスマスター
RAMPA 認定医
ジンマーデンタル公認インストラクター
長崎バイオブロック研究会主宰



【バランス】

Balance

どのような歯科治療でも、「バランスをとる」ということは大事であるが、バイオブロック、RAMPAによる顎顔面口腔育成治療においては、大きな意味での『バランス』が特に重要となる。

不正咬合を訴えて来院される患者の顔貌を観察すると、多くの場合、中顔面領域の前方への成長が不足して、その代わりに下方への発育傾向が大きくなっており、この崩れた骨格バランスを正常な方向へシフトさせていくのが、顎顔面口腔育成治療概念のベースとなっている。また、不正咬合患者の口腔内では、一定の割合で術前の左右非対称があり、その治療過程においては一時的にはあっても、ほとんどの場合で左右や前後のバランスが崩れる。

今回、顎顔面領域の水平成長を促進させながら歯列不正を治療していく過程で、いつ、どのようにより『バランス』をとっていくべきか、症例を通して考えてみたいと思う。

矢島 由紀 (やじま ゆき)

〈略歴〉

1994年 長崎大学歯学部卒

2004年 Y.H.C.矢山クリニック勤務 (佐賀市)

医師と協力して難病の方の歯科治療に従事

2011年 ゆきデンタルクリニック開院 (佐賀市)



【全身疾患と前方成長とのかかわり】

Cranio-Orofacial forward growth guidance and systemic disease

私は私の歯科医師人生の多くの時間を難病の方と共に過ごしてきました。そこで、難病の方の子どもの頃からの経過や現在の口腔の状況に似通った特徴があること、また歯科疾患を改善していくと原因不明と言われるある種の疾患の寛解があることを経験しました。

そのような経験からなるべく病気にかかるリスクを減らす歯科治療を模索していたところ、この顎顔面口腔育成法に出会いました。

「それ自体の症状は無症状か軽微であるが、それが原因となって遠隔の諸臓器に二次的疾患を引き起こすことを病巣感染といい、病巣感染による疾患の99%以上が歯や扁桃を原病巣として生じている。もっとも生じやすいのは口腔内だ。」と1917年にシカゴ大学医学部教授のDr.Frank Billingsが言っています。

それから、約100年が経過しカリエスに対する予防の意識は向上したものの、顎の劣成長に対してはまだこれから対策が必要です。気道の狭窄による扁桃や上咽頭の慢性炎症は病巣感染の原病巣となってしまいます。

難病の予防のカギは小児期からのライフスタイルの改善と口腔咽頭の発育のサポートにあると考えて日々診療にあたっています。

一般講演

福重真佐子 (ふくしげ まさこ)

〈略歴〉

1998年 九州歯科大学卒業

2001年 ふくしげ歯科開業 (大阪府河内長野市)

2007年 医療法人天真会ふくしげ歯科開設



【バイオブロックとRAMPA 日々の診療への導入】

Introduce of Biobloc therapy & RAMPA therapy

バイオブロック治療およびRAMPA治療（以下、両治療とする）を知る前に、当院では既に様々な口腔内装置を用いた成長期の子どもを対象とする矯正治療に取り組んでいた。両治療を知り導入して以降はほとんど全ての症例をこの両者で手がけるようになった。そうになったのは従来の取り組みで対応が難しかった症例に対して、より良いアプローチができるからである。

特に骨格性の歯列不正とされる骨の劣成長やひずみが大きな症例では、手を変え品を変えて様々な治療を行い、患者も術者も共に努力を重ねても改善が難しく、結局のところ顔貌はそのまま、歯列部分の改善にとどまることも多かった。患者が潜在的に求めているのは単なる歯列の改善ではなく、表情なども含めた顔貌全体の改善であることは分かっているものの、どうすればそれを実現できるか分からずにいた。

そんな中、両治療に出会い、そこに大きな可能性を感じ取り組むようになった。同じような状況からスタートして、両治療を用いたアプローチとそうでないアプローチをした症例をほぼ同時に経験し、その違いを実感した。両治療は、従来の方法とは考え方や概念が大いに違うため、得られる結果にも大きな違いが生じるのである。本講演では、この経験を元にこれから両治療に取り組もうと考える方に対して、両治療にどのような特異性があるのか長所・短所合わせてお話ししたい。また、過渡期に特有の諸問題についてもお話ししたいと考える。

岩前 里子 (いわまえ さとこ)

〈略歴〉

1990年 明海大学歯学部卒
明海大学第二口腔外科医局入局
1993年 群馬県島田記念病院歯科口腔外科出向
1996年 退局、島田記念病院退職
1998年 埼玉県児玉郡神川町 さとこデンタルクリニック開業



【直立動態を考慮したRAMPA、バイオブロックセラピー】

RAMPA and biobloc therapy approaching from gravitational physiology

生物は個体発生時より分子レベルで振動をしながら膨張し成長する。直立2足歩行をするヒトの成長を鑑みる時、前方成長の方向性は非常に理にかなったものであり、それをゴールに設定したRAMPA、バイオブロックセラピーは子供達の健全な成長をサポートするものである。直立動態を安定させるという新たな因子を加えて治療を組み立てることで非常に良好な結果が出たので、今回症例を提示して報告したい。

直立動態は二足歩行するヒトが転倒しないようにバランスをとりつつ、揺れながら立つ仕組みにより成り立っている。頸椎の上の置性体である頭蓋は後頭骨と第一頸椎の関節面を支点としてスウィングし、吊性体である下顎の動きにより転倒しないように制御されている。(スウィング理論)

当院では中顔面を上前方誘導時に、下顎の三次元的ポジションを口腔内装置を用いてコントロールしている。これにより直立動態の安定化を図り頸や体幹のねじれや不良姿勢を改善させる。RAMPAのフェイシャルマスクもより安定し、装着部位や顎関節の疼痛や不快感が減少した。また口腔内装置の安定化によりアンカーロスを減少させることができた。従来認めた拡大ネジの回転不良や対顎装置の破損や脱離を防止することができるため患者、その保護者、術者のストレスが激減した。拡大、牽引の結果も良好で、特に非対称の強い症例には効果を発揮することがわかった。

また従来は口腔内装置の作成が困難で技工サイドの経験値に頼らざるを得なかったが、直立動態が安定する下顎ポジションで咬合採得を行うことにより作成が簡易になった。

ポスターセッション

展示場所 御茶ノ水ソラシティー カンファレンスセンター
10月25日(土) 9:30～ 11月26日(日) 16:00

- 高橋 伸滋 「前歯部過蓋咬合を伴うアングルⅠ級に対するバイオブロックセラピーの臨床経過報告」
- 馬場 崇 「埋伏した上顎第二乳臼歯を伴うANGLEⅠ級症例に対しRAMPAセラピーを応用した一例」
- 有住 隆史 「下顎前歯部舌側傾斜を伴う低位舌症例にPRA分析を行った症例」
- 須藤 孝秀 「機能的矯正治療後、咬合不全を呈した骨格性Ⅲ級患者にRAMPAセラピーを用いた1例」
- 金子信一郎 「上顎骨の劣成長にバイオブロックとRAMPAセラピーを用いた2例」
- 牧野喜久子 「ガミースマイルと鼻閉を有する患者にバイオブロックセラピーを用いた1例」
- 竹末 寿子 「骨格的非対称患者の上顎洞内粘膜肥厚が消失した一例」
- 福田 千明 「バイオブロック・RAMPAによるガミースマイルの改善を行った症例
ー混合歯列期前期症例の治療経過報告ー」
- 三瀬 功二 「顎顔面口腔育成における治療介入時期についての考察」
- 熊谷 倫恵 「直立動態を考慮したRAMPA、バイオブロックセラピー ～体軸を整える～」
- 高崎 智也 「Beautiful Smile Guidance with Biobloc Therapy」
- 稲澤 浩晃 「バイオブロックセラピー StageⅢまでの治療経過報告」
- 岩崎 友裕 「アングルClassⅠ叢生に対するバイオブロックセラピーを用いた1例」
- 国本 洋司 「小児の鼻閉、口呼吸等の調査（当院の来院患者の保護者へのアンケート結果）」
- Hyeong-un Kim 「Treatment of Facial Asymmetry with Unilateral Posterior Crossbite Using the RAMPA System and Biobloc Therapy : Case Report」
- Mira Park 「Skull Modification by Mechanical Effect of PAMPA & Biobloc」